
種生物学会ニュースレター No. 36

THE SOCIETY FOR THE STUDY OF SPECIES BIOLOGY NEWSLETTER 36

March 2008

目次

片岡奨励賞選考報告.....	1
片岡奨励賞者の研究内容紹介.....	2
第2回種生物学会片岡奨励賞候補者の募集.....	4
第1回 Plant Species Biology 論文賞選考報告.....	4
第39回種生物学シンポジウムの記録.....	5
第40回種生物学シンポジウム開催予告.....	7
2007年度総会の記録.....	8
2008 年度会費納入のお願い.....	11
会員異動.....	11

片岡奨励賞選考報告

第1回片岡奨励賞は、推薦のあった候補者について慎重に検討した結果、以下の2名に授与することを決定した（五十音順）。

川北 篤（京都大学人間・環境学研究所）

内貴 章世（大阪市立自然史博物館）

授賞理由

川北 篤 氏

植物と送粉者間に見られるさまざまな寄生・共生関係の起源と進化の研究を、精力的なフィールドワークと分子系統学的解析を通じて進めている。特にカンコノキ属植物における絶対送粉共生系の起源と進化に関する研究は、生物多様性の創出・維持機構を探る重要な貢献として、高く評価されている。

このような研究面での活躍に加え、種生物学会では2003年のプレシンポジウム講演を行ったほか、2006年ならびに2007年の大会シンポジウムの企画・運営を務めるなど、学会への貢献は大きいものがある。

内貴 章世 氏

一貫してアカネ科植物の花の異形性とその進化に関する研究を進め、特にアリドウシ属植物の研究では、花粉形態、倍数性などと異型花柱性の相関を示し、倍数化に伴って異型花柱性が消失する事例を発見した。その後、研究範囲を東アジアに広げ、アリドウシ属の分類学的、進化生物学的研究に成果を挙げている。現在は大阪市立自然史博物館の学芸員として、博物館活動を通じて種生物学の普及に取り組んでいる。

両名のこのような功績を評価し、今後のいっそうの活躍を期待して片岡奨励賞を贈ることを決定した。

片岡奨励賞選考委員会委員長 角野 康郎

片岡賞授賞者の研究内容紹介

川北 篤

この度は、種生物学会片岡奨励賞を賜り大変光栄に存じます。可知直毅会長、角野康郎先生をはじめ選考委員の諸先生方、ならびに学会賞制定にご尽力された河野昭一先生、および片岡政之氏のご遺族の方々に厚く御礼申し上げます。受賞に際しまして、私のこれまでの研究について簡単に紹介させていただきます。

私は学部生の頃、京都近郊の山林で植物採集をしながら、植物の花の色や形にはどのような意味があり、なぜこれほどまでに多様なかということにとっても興味を持っていました。ちょうどその頃「花生態学の最前線」を読んだことがきっかけで種生物学会の存在を知り、自分も植物の送粉様式の多様性について研究したいと強く思うようになりました。種生物学会に入会したのはその何年か後のことですが、植物の生活史研究に根ざした学会の活動にとっても親しみを覚え、以来さまざまな機会に参加させていただいております。

現在私はコミカンソウ科植物の送粉様式の進化について研究しています。コミカンソウ科といってもあまりなじみがないかと思いますが、カンコノキやコバンノキ、ヒトツバハギなどが含まれる一群で、従来はトウダイグサ科に分類されていました。私が大学院に入学した頃、当時の指導教官であった京都大学大学院人間・環境学研究科の加藤真先生が、ウラジロカンコノキの種子を食害するハナホソガという蛾が、実はこの植物の唯一の送粉者であることを発見されました。ハナホソガの雌は産卵のために花を訪れますが、その際に幼虫が確実に種子を食べられるように、口吻を用いて自ら雄花で花粉を集め、雌花に授粉します。孵化した幼虫は発達途中の種子を食べて成熟しますが、一部の種子が食われずに残るため、両者は互いに繁殖を依存し合う絶対的な共生関係にあります。ハナホソガは自らの繁殖のために花を訪れるため、カンコノキ属の植物はいずれも花蜜を分泌せず、一見つぼみにしか見えないような極めて小さく地味な花をつけています。

私はこの発見を受け、ではカンコノキ属に近縁な植物はどのような送粉様式を持ち、ハナホソガとの特殊な共生系はどのように起源したのか、ということに興味を持って研究を行ってきました。カンコノキ属が含まれるコミカンソウ科は全世界の熱帯域を中心に約 2,000 種が知られる大きなグループですが、東南アジア各地をはじめ、ニューカレドニアやマダガスカルなどで送粉様式の調査を行ったところ、ハナホソガによる送粉はカンコノキ属とは系統的に隔たったいくつかの種群で独立に起源しており、全世界で実に 600 種近くがそれぞれの種に特異的なハナホソガと共生関係を結んでいることが明らかになってきました。種子食者による送粉は植物にとって大きなコストを伴うため、容易には進化しないと考えられていますが、コミカンソウ科でこうした共生系が並行的に何度も起源したことは、能動的送粉行動の進化という送粉者側の革新的な適応が、その後の植物の進化や多様化にいかにより大きな影響を与えるかを示すとても良い例ではないかと考えています。

カンコノキ属の植物は、いずれも琉球列島では道端や林縁でごく普通に見られるものばかりです。しかしこれほどありふれた植物にできえ、驚くような発見が隠されていたことを思うと、植物の生活史を地道に明らかにすることの大切さをつくづく思い知らされます。今後もこうした姿勢を忘れることなく、植物の驚くような生活史の多様性を少しずつ明らかにしていければと考えております。

このたび第1回種生物学片岡奨励賞をいただきました内貴章世です。現在、大阪市立自然史博物館で学芸員をしています。学部の卒業研究の時からアカネ科の植物を対象に、また被子植物の繁殖様式のひとつである二型花柱性にも着目して研究をしてきました。以下にこれまで行ってきた主な研究内容を紹介します。

学部の卒業研究ではアカネ科のコンロンカ (*Mussaenda parviflora*) において、送粉者および花の形態の観察、袋掛け・交配実験を奄美大島、西表島で行いました (Naiki and Kato 1999)。花の形態の観察ではコンロンカは二型花柱性を持っていましたが、さらに袋掛け・交配実験によって雌雄異株であることが明らかになりました。主な送粉者はアゲハチョウ類、スズメガ類であり、両者とも重要な送粉者であることが袋掛け実験により示されました。二型花柱性から雌雄異株性への進化には口吻の長い昆虫から短いものへの送粉者の変化が引き金になったと考えられる例がありますが、コンロンカの送粉者は鱗翅類で長舌であり、雌雄異株性への進化はこの仮説からは説明できません。現在では疑問に思っていますが、当時はコンロンカの花筒内上部には毛が密生しており、これが長花柱花から短花柱花への花粉の流れを妨げ、長花柱花における雄機能の消失、短花柱花における雌機能の消失を引き起こしたと考察しました。

大学院では、東アジア暖帯に分布するアカネ科アリドオシ属 (*Damnacanthus*) に関して、国内外のさく葉標本に加え、野外で自ら採集した標本に基づき、栄養器官・生殖器官・花粉の形態観察に基づく分類、交配実験、染色体数の観察、分子系統学的解析など様々な観点で研究を行いました。本研究では形態形質によってアリドオシ属全体を8種に分類しました (*D. angustifolius*, *D. biflorus*, *D. giganteus*, *D. indicus*, *D. macrophyllus*, *D. officinarum*, *D. okinawensis*, *D. tsaii*)。アリドオシ属にも二型花柱性があることを明らかにし (Naiki and Nagamasu 2003)、さらにそれが花粉の形態や倍数化とも強い相関があるという稀な現象を報告しました Naiki and Nagamasu 2004)。分類群にかかわらず、2倍体 ($2n = 22$) は二型花柱性を持ち、4倍体 ($2n = 44$) は二型花柱性を持っておらず、常にめしべが長い花を持っています。葉緑体遺伝子を用いた分子系統学的解析では、アリドオシ属は単系統であり、2倍体、4倍体が同じハプロタイプを持っている場合が複数のクレード、枝でみられたことから、倍数化は複数回起源したと考えられ、4倍体には必ず二型花柱性が見られないこと、4倍体の花が常にめしべの方が長いことを考え合わせると、アリドオシ属における二型花柱性の崩壊の直接的な要因は倍数化であることが示唆されました。

現在は、アリドオシ属の分類学的再検討の最終的なまとめの段階に入っています。中国に分布しているもので、どうしても現地で確認しなければならないものがあり、あと1ヶ所、海南島にこの3月に調査に行きます。

新たな分類群にも手をつけ始めています。将来的には属全体の分類学的研究を行いたいと考えているルリミノキ属 (*Lasianthus*) に関して、主に西表島で見られる分類群について、開花フェノロジーや繁殖様式の調査を進めています。また、二型花柱性のアカネ科における遺伝様式を解明したいと思い、古典的なやり方ですがサツマイナモリ (*Ophiorrhiza japonica*) を用いて交配実験を始めました。設備が不十分なので思うようには進んでいません。

博物館では展示、普及行事など多くの仕事があり、自分の研究のために割ける時間はどうしても少なくなってしまう。しかし、そのようなことを言い訳にせず、今回いただいた奨励賞を励みとして、研究に邁進していきたいと思っております。ありがとうございました。

Naiki, A. and M. Kato. 1999. Pollination system and evolution of dioecy from distyly in *Mussaenda parviflora* (Rubiaceae). *Plant Species Biology* **14**: 217–227.

Naiki, A. and H. Nagamasu. 2003. Distyly and pollen dimorphism in *Damnacanthus* (Rubiaceae). *Journal of Plant Research* **116**: 105–113.

Naiki, A. and H. Nagamasu. 2004. Correlation between distyly and ploidy level in *Damnacanthus* (Rubiaceae). *American Journal of Botany* **91**: 664–671.

第2回種生物学会片岡奨励賞候補者の募集

種生物学会片岡奨励賞の候補者を募集します。本賞は種生物学の進歩・発展に貢献をし、また今後の活躍が期待される若手研究者に贈られるものです。会員の皆様の積極的な他薦または自薦をお願いします。授賞者の決定は選考委員会で行われ、2008年度総会において賞状と副賞が授与されます。

募集要領

資格：2008年度総会の時点で本会の会員歴が1年以上であり、原則として40才以下であること。

応募方法：以下の書類を下記の選考委員長宛に送付してください。なお推薦は2年間有効です。

他薦の場合

- (1) 候補者の氏名と連絡先
- (2) 推薦理由書 (A4用紙に1枚程度)
- (3) 被推薦者の業績リスト(様式は自由。作成が困難な場合は、選考委員会が候補者に提出を依頼しますので不要)。

自薦の場合

- (1) 略歴と連絡先
- (2) 自薦の理由書 (A4用紙に1枚程度)、
- (3) 業績リストと代表的な業績の別刷またはコピー各1部
- (4) 種生物学会への貢献 (学会誌への論文掲載、シンポジウムの企画・講演、役職歴任、等)。

応募書類の提出期限：2008年7月31日

応募書類の送付先：657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学理学研究科生物学専攻 角野 康郎 宛

電子メールでの応募も受け付けます。kadono@kobe-u.ac.jp まで必要書類を添付書類としてお送り下さい。

受賞者には、自らの研究紹介を含む総説を *Plant Species Biology* に寄稿していただきます。

第1回 Plant Species Biology 論文賞選考報告

第1回種生物学会論文賞 (Plant Species Biology Best Paper Award 2007) 選考に関してご報告させていただきます。種生物学会論文賞の選考は、会長から委嘱された工藤岳、北村系子、加藤真、川窪伸光、小林剛、大原雅 (以上、Plant Species Biology 編集委員) および原登志彦 (前編集委員長) の7名の選考委員で行いました。今回は、第1回目の受賞選考ということもあり、これまですでに発刊された、PSB2006, Volume 21(1-3), PSB2007, Volume 22(1-2)に掲載された Regular Paper (26編) を対象とし、各委員の投票による選考を行いました。その結果以下の2編の論文が第1回種生物学会論文賞に決定いたしました。

- Nagamitsu, T., Kawahara, T. and Kanazashi, A. :Endemic dwarf birch *Betula apoiensis* (Betulaceae) is a hybrid that originated from *Betula ermanii* and *Betula ovalifolia*. PSB (2006) 21: 19-29
- Ward, Lena.K: Lifetime sexual dimorphism in *Juniperus communis* var. *communis*. PSB (2007) 22: 11-21.

両論文の筆頭著者には楯と賞状。そして共著者全員に賞状をお贈りさせていただきました。また、表彰式は、昨年神戸で開催された種生物学シンポジウムで行われ、永光輝義さんがご出席下さいました。

Plant Species Biology 論文賞選考委員長 大原 雅

第39回種生物学シンポジウムの記録

2007年11月30日～12月2日 六甲山 YMCA

プレシンポジウム

東アジア独自の穀類のモチ性とモチ文化. 阪本寧男 (京都大学名誉教授)

シンポジウム1. 作物の進化はどこまで分かってきたか、今日的到達点

オーガナイザー: 森直樹 (神戸大学農学研究科)・石井尊生 (神戸大学農学研究科)

- 野生コムギの遺伝的多様性と栽培コムギの起原について: 葉緑体DNAの解析結果から. 森直樹 (神戸大学大学院農学研究科)
- 考古学的アプローチ: 考古遺物からみたコムギの栽培化について. 丹野研一 (総合地球環境学研究所)
- コムギの伝播: コムギのユーラシア東方への伝播について. 加藤謙司 (岡山大学)
- なぜ中・南米ではイネの栽培化が起らなかったのか? 秋本正博 (帯広畜産大学)
- 野生イネの自生集団における遺伝的多様性調査結果から. 石井 尊生 (神戸大学院・農学)
- オオムギの二条・六条の違いを支配する遺伝子について. 松岡 由浩 (福井県立大学)
- トウモロコシは、いつ、どこで、何回、栽培化されたか? 小松田 隆夫 (農業生物資源研究所)

シンポジウム2. 自然観察が拓く進化生態学の最前線

オーガナイザー: 川北篤 (京大大学生態学研センター)・奥山雄大 (京都大学人間・環境学研究所)

- 自然観察が拓く花の匂いの生態学. 岡本朋子 (京都大学大学院人間・環境学研究所)
- サトイモ科植物とタロイモショウジョウバエの送粉共生. 高野宏平 (長崎大学熱帯医学研究所)
- タイの熱帯季節林における大型種子をもつ樹木(セ ンダン科 *Aglaia spectabilis* とカンラン科 *Canarium euphyllum*) の種子散布. 北村俊平 (立教大学理学部)
- クルミホソガにおけるホストレース形成: 寄主転換の遺伝機構とホストレースの維持機構. 大島一正 (北海道大学農学研究科)
- 虫えい食昆虫の自然史. 杉浦真治 (森林総合研究所)
- 右と左の共進化: ヘビが促進するカタツムリの種分化と多様性. 細将貴 (京都大学理学研究科)

ポスター発表 (登録番号横の星印はポスター賞を示しています)

P-1 ヒエ属におけるイネ sh4 ホモログの塩基配列変異. 青木大輔・山口裕文 (大阪府大・生命環境)

P-2 コムギ近縁野生種における種子休眠性の個体内. 丹羽未来子 1・Hakan Özkan 2・大田正次 1 (1. 福井県立大・生物資源, 2. トルコ共和国チュクロバ大学農学部)

P-3 シダ植物の孢子形成フェノロジーと孢子食トゲアシガ亜科ガ類 (Stathmopodidae) の寄主特異性. 澤村 恵・川北 篤・加藤 真 (京大院・人環)

P-4 動く植物データへ向けて—出発点は飛翔するアホウドリ. 島谷健一郎 (統計数理研究所)

P-5* オオバナノエンレイソウにおける繁殖様式の進化—自家和合性から自家不和合性の進化—. 久保田涉誠・大原雅 (北大院・環境科学)

P-6 異質倍数化とタネツケバナ属の生育環境. 廣瀬恭祐 1)、清水健太郎 2)、工藤洋 1) (1) 神戸大・理・生物, 2) チューリヒ大・理)

P-7 雑種起源種コジマエンレイソウの葉緑体DNAに基づく地域集団の系統解析. 山岸 洋貴

久保田 涉誠 大原 雅 (北大・院・環境科学)
P-8 静岡県中遠地域における雑草化 *Lolium* 属
集団の遺伝的背景. 黒川俊二 1・小林寿美 1・池
田堅太郎 2 (1 畜産草地研究所, 2 東北農業研究セ
ンター)
P-9 分子シャペロンによるシロイヌナズナ属自
然集団の隠蔽変異. 山口正樹・工藤 洋(神戸大
院・理学・生物)
P-10 ツリフネソウにおける1花開花期間中の
全訪花昆虫の行動. 加藤彩・金潤姫・川窪伸光
(岐阜大院・農学・多様性保全)
P-11* 花の形態変化に反応するポリネーター
の訪花直前飛行. 金潤姫・加藤彩・川窪伸光 (岐

阜大院・農学・多様性保全)
P-12 樹木の展葉・落葉時期の最適戦略につい
て. 高田壮則 (北大・地球環境)
P-13* 雄性先熟ミヤマリンドウの開花パター
ン一個花・花序・個体群を通して. 川合由加・
工藤 岳 (北大院・環境科学)
P-14 カンコノキーハナホソガ絶対送粉共生系
における開花フェノロジーの多様性. 後藤龍太
郎・岡本朋子・川北 篤・加藤 真 (京大院・人
間環境)
P-15 浮稲の深水条件下での節間伸長におけ
るエクспанションの関与. 笹山大輔・東 哲司・
伊藤一幸 (神戸大院・農学・熱帯有用植物)

種生物学会シンポジウムに参加して

学会への参加は3度目、種生物シンポジウムへは昨年の滋賀県高島市マキノ町でのシンポジウムに続き2度目の参加となりました。さまざまな分野を専門とする方々がこられ、講演や口頭発表、ポスター発表をされるので、私にとって学会は新たな知識に直接触れることのできる刺激的な場所です。今回の学会も楽しくさまざまな発表を聞かせていただきました。

今回のシンポジウムはコムギやイネ、トウモロコシなどのイネ科の植物が多く取り上げられました。それは私にとってとても有意義なものとなりました。なぜなら、イネ科植物のもつ様々な形態的・生態的特徴をより好奇心を持って観察することができるようになったからです。現在、私は卒業研究で濃尾平野最北域の植物相の解析をしているのですが、どうしてもイネ科の植物に苦手意識があり、同定が意欲的に進められなくなっていました。しかし今回、イネ科の植物のさまざまな講演を耳にしたことで、単に知識が広がっただけでなく、研究意欲が増した気がしました。イネ科に限らず、種の同定に固執するあまり、知らず知らずのうちに見方が偏ってしまう私にとって、種生物シンポジウムのような学会の場は、様々な方面からの植物の知識を得る場所であると同時に、より多くの視点から植物を見る機会を提供してくれる場所でもあるようです。

また、多くの参加者との交流もとても有意義でした。特に種生物シンポジウムは、とても開かれ

た雰囲気をもった泊まり込み型の学会であるため、色々なお話を伺うことができました。学会では、そもそも要旨や発表の内容だけでも非常に興味深いものですが、個々の研究活動には、表には出てこない多くの議論や試行錯誤があるのだと思います。そのような研究活動の実態・実際(裏も表も)を多様な参加者と交流することで触れられることができるのが、種生物学会の醍醐味のように思えます。

今はまだ学部生の身で、学会に参加されている多くの方々とは知識レベルに差があるため話を聞くばかりですが、少しずつ修行を積んでより高いレベルでの知的交流ができるようになればと考えています。次回のシンポジウム等接する機会がありましたら、その折、よろしく願い致します。
桑原翔太郎 (岐阜大学応用生物科)

第39回種生物シンポ参加報告

種生物シンポへの初参加は昨年度の琵琶湖大会です。この時は、日帰り参加で、ちょっとのぞいてみようという気持ちでした。行ってみると、こじんまりとした会場と、参加者の気さくな雰囲気が心地良かったので、来年は発表付き宿泊で参加しようと思ったのでした。

そんな一年も前からの参加決意に関わらず、出発の前日にポスターを完成させ、プリントアウトは出発日の朝と、相変わらずの慌しさで飛行機に乗りました。六甲駅着くものの地図を忘れ、一人さまよい、タクシーの中で金額メータにドキドキ

しながら会場に行きました。

時期は12月の第一週、北海道では既に雪が積もって冬景色なのに、六甲はまだまだ紅葉真っ盛りでした。

二日目シンポの『作物の進化はどこまで分かってきたか、今日的到達点』は、私も植物を研究対象にしている点で共通しますが、なかなか聞く機会のない分野の発表で新鮮でした。歴史や考古学といった要素が含まれた分野で、歴史から植物を見るようで楽しかったです。

二日目の昼にはポスター発表がありました。ここでは発表時間が短いことから、それほど質問もされずに終わります。ポスター発表の本番はその日の夜の懇親会が終わったあとです。ここではまさにエンドレスに延々夜中まで質疑応答が続きました。皆が、「種生物シンポは、飲みながら延々議論をするのや。」と言っていた通りです。それにしても、学生にとって、これほどじっくりと自分の発表を聞いてもらえる機会は種生物のポスター発表以外になかなかないと思います。

ところで懇親会の料理は毎年こんなに豪華なのでしょうか。私はお酒が飲めないのですが、その

分、料理をお腹いっぱい頂きました。とても美味しかったです。

最終日の『自然観察が拓く進化生態学の最前線』では、植物と動物など種間の関係を対象にしたものが多く、あらためて自然界の複雑さを感じました。特に印象に残ったのは大島一正さん(北大)によるホストレース形成の研究でした。初めて聞く話でしたが、その題材自体が非常に魅力的で、また、幼虫と雌成虫の形質で独立した遺伝基盤を持つことや、ホストレースの維持機構についての話しにはどっぷり引き込まれました。

今回、ポスター賞の副賞として『保全遺伝学入門』を頂きました。こんな素晴らしい副賞がいただけるとは思いもしなかったもので、とても感激しています。さっそく年末年始に読ませていただきました。ありがとうございました。

最後になりますが、シンポの企画された方々、シンポ運営に携わられた方々、私のポスターの前で足を止め、話を聞いてコメントまでくださった方々、ありがとうございました。皆さまのおかげで、とても楽しい時間を過ごすことができました。川合由加(北海道大・院・環境科学)

第40回種生物学シンポジウム開催予告

今回の種生物学シンポジウムは、2008年12月5日(金)ー12月7日(日)に茨城県守谷市のデュープレックスセミナーホテル(<http://www.retec-duplex.co.jp/shinmoriya/plan.html>)で開催します。プログラムや参加申し込みについては次号のニュースレターでご案内します。また、詳細が決まりしだい学会のウェブサイトでもご案内します。皆様の参加をお待ちしています。

第40回シンポジウム実行委員長
委員長補佐

堀 良通(茨城大学)
石田 厚(森林総合研究所)

2007 年度総会の記録

2007 年度総会は 2007 年 12 月 1 日に六甲山 YMCA で開催された。はじめに可知会長の挨拶があり、その中で、現執行部は「入って良かった種生物」を目指して種生物学会を運営する、との抱負が述べられた。その後、神戸大学の伊藤一幸先生を議長に選出して総会が開始された。

報告事項として、庶務報告（木下）、英文誌編集委員会報告（川窪 編集委員長代理）、和文誌編集委員会報告（工藤）、2007 年度の決算中間報告（2007 年 1 月 1 日－2007 年 11 月 22 日）（西谷）が行われた。また、林一彦氏によって 2006 年度の会計監査報告が行われ、会計監査報告は拍手で承認された。

審議事項として、2008 年度予算案と会則の一部改正が執行部から提案された。はじめに会計幹事が 2008 年度予算案について説明した。質疑の後、2008 年度予算案は賛成多数で承認された。次に会長が会則の一部改正についての説明を行った。質疑の後、会則の一部改正は原案どおり賛成多数で承認された。執行部の用意した議案は以上であり、会員から動議はなく、議事は全て終了した。

最後に会長から、現在の会則には不備が多いので 2 年後の総会を目指して会則の全面的な見直しを行い、との決意が述べられた。最後に第 40 回種生物学シンポジウムの予定に関する報告がなされた。

2007 年度庶務報告

- 1 月 分類学会連合総会出席
- 4 月 国立情報学研究所「著作権の取り扱いに関する調査」への回答
- 4 月 科学技術振興機構「電子アーカイブ対象候補誌基礎調査」への協力
- 5 月 ニュースレター No.34 の発行
- 7 月 PSB 出版委託契約を Blackwell Publishing とかわした
- 10 月 ニュースレター No.35 の発行
- 10 月 片岡奨励賞選考委員会
- 11 月 PSB 論文賞選考委員会
- 12 月 自然史学会連合総会出席

英文誌編集委員会報告

- 2007 年 1 月より、原登志彦さんより、大原雅が編集委員長を引き継ぎ、工藤岳、北村系子、加藤真、川窪伸光、小林剛（副編集委員長）の 6 人体制で編集を開始した。
- 編集補助が、佐伯孝子さんから河田里紗さんに引き継がれた。
- Wiley-Blackwell 社の館野佐保さんが本誌担当になられた。
- 2007 年は、PSB Vol. 22 (No.1, 2, 3) を（スケジュール通りに）発刊した。
- 8 月よりオンラインシステムによる投稿・編集を開始した。

- PSB Best Paper Award 2007 として 2 編の論文を選出した。（選考報告を参照）
- 投稿原稿の分野の偏りがあり、担当編集ならびにレフェリーに多くの負担をおかけしたが、引き受けて下さった皆様へ深く感謝したい。
- 2008 年は、4 月、8 月、12 月に Vol. 23 を定期刊行の予定。
- PSB Best Paper Award 2008 の選出（1 編を予定）。

和文誌編集委員会報告

- 新編集委員：編集委員長 工藤 洋、副編集委員長 藤井伸二、矢原徹一、西脇亜也、川窪伸光、陶山佳久、吉岡俊人、川北 篤、奥山雄大、安元暁子、永野 惇、川越哲博、細 将貴
- 発刊状況報告：2006 年 3 月 31 日種生物学研究 30 号「農業と雑草の生態学」（芝池・浅井氏 責任編集）初版 2,500 部を発刊しました（2006 年度事業）。これで、既刊が 7 冊となり、現在編集中が 4 冊となります。発刊後の 7 冊の販売状況は総じて良好です。2008 年 3 月に次号「共進化の生態学」を発刊（2007 年度事業）します
- 発刊予定：2008 年中に「種子発芽（題は未定）」を発刊予定（2008 年度事業）です。

会則改正

種生物学会 学会賞に関する細則5は 2007 年度総会において以下のように改正されました。

細則5 種生物学会片岡奨励賞と Plant Species Biology 論文賞には賞状と副賞を授与する。種生物学会ポスター賞には賞状を授与する。副賞の原資は片岡基金とする。

その他

種生物学会ポスター賞には副賞はありませんが、ポスター賞に対して文一総合出版から「保全遺伝学入門」の提供があり、3名のポスター賞授賞者にそれぞれ1冊を贈りました。文一総合出版に対して感謝します。

この本の書評はニュースレター37（2008年10月発行予定）に掲載されます。

2007 年度会計報告・2008 年度予算案

2007年度の収入（2006年度からの繰越金を除く）は支出を93万円ほど下回り、今年度への繰越金は100万円を割りました。これは、PSBの出版費用1回分を支払えるかどうかという額です。またこの繰越額は、2007年内に納められた今年度会費223万円の半分にもとどかず、会の財政がとても厳しい状況にあることを示しています。更に予算のうえでは、今年度も支出が収入を60万円近く上回っており、このままでは2009年度には赤字に転ずる可能性もあります。2007年度の最大の支出は、例

年と同様にPSBの出版委託費で、約450万円でしたが、この中にはオンライン投稿・査読システムの立ち上げ費用80万円が含まれています。今後このシステムにかかる経費は、年会費8万円のみとなります。

収入にみあった支出にするために、発送費や事務費の節約など可能なところから取り組むつもりですが、会員の皆様には、こうした会の現状をご理解頂き、会費の納入にご協力下さいますようお願い申し上げます。2007年度までの会費は、ほぼ9割の方が納めて下さいましたが、1月30日現在で、残念ながら約40名、総額55万円分が滞納されている状況です。会費が100%納入されますと、その他の収入と合わせて500万円弱の総収入となり、支出予算にかなり近づくことができます。ただしそれでも、前納された会費に依存した運営には変わりなく、会の財政を安定させるためには抜本的な対策が必要です。

会計監査報告

収支決算報告書と内容明細表および預金通帳と領収書などを照合した結果、2007年の会計報告を適性と認めます。

2008年1月12日 会計監査委員
渡邊 幹男
石濱 史子

2007年度の会計監査は、2008年1月12日、首都大学において、渡邊幹男、石濱史子両氏によって行われました。なお、会則により2007年度の会計監査報告は2008年度の総会で正式に報告されます。

2007年度決算報告（2007年1月1日－2007年12月31日）

収入の部 項目	2007年 収入	2007年 収入予算
会費	4,118,000	3,400,000
2007年まで	1,886,000	3,350,000
2008年以降	2,232,000	0
海外一般	0	50,000
購読料	84,000	192,000
バックナンバー	70,760	50,000
著作権料	79,008	50,000
PSB ロイヤリティ	253,075	300,000
超過ページ代	220,000	200,000
その他(利息など)	14,858	10,000

支出の部 項目	2007年 支出	2007年 支出予算
印刷費	160,860	150,000
Newsletter (No34,35)	160,860	150,000
出版委託費	4,890,146	4,500,000
PSB 2007年 Vol 22	4,508,600	4,000,000
和文誌 2007年(30号)	381,546	500,000
発送費	60,640	200,000
Newsletter (No34,35)	60,640	100,000
和文誌 2007年(30号)	0	100,000
事務費	223,879	420,000
和文誌編集	0	10,000
英文誌編集	0	10,000
その他	223,879	400,000
和文誌編集補助	50,000	60,000
英文誌編集補助	350,000	250,000
シンポジウム補助金	0	100,000
自然史学会連合分担金	20,000	20,000
日本分類学会連合分担金	0	10,000
会計監査交通費	13,000	13,000

小計	4,839,701	4,202,000
前年度繰越金	1,913,830	1,913,830
合計	6,753,531	6,115,830

小計	5,768,525	5,723,000
次年度繰越金	985,006	392,830
合計	6,753,531	6,115,830

一般会員:342名(+4), 学生会員:38名(-24), 国内機関購読:11名, 海外会員(機関を含む):34名, 計425
*1 2007年12月31日現在。+は、昨年度からの会員数の増減を示す。

2008年度予算(2008年1月1日－2008年12月31日)

収入の部 項目	2008年 収入予算
会費	3,750,000
国内会員	3,700,000
海外会員	50,000
購読料	168,000
バックナンバー	40,000
著作権料	50,000
PSB ロイヤリティ	270,000
超過ページ代	60,000
その他(利息など)	2,000

支出の部 項目	2008年 支出予算
印刷費	160,000
Newsletter (No36,37)	160,000
出版委託費	4,100,000
PSB 2008年 Vol 23	3,700,000
和文誌 2008年(31号)	400,000
発送費	67,000
Newsletter (No36,37)	65,000
和文誌 2008年(31号)	2,000
事務費	150,000
和文誌編集補助	30,000
英文誌編集補助	250,000
シンポジウム補助金	50,000
自然史学会連合分担金	20,000
日本分類学会連合分担金	20,000
男女共同参画連絡会分担金	5,000
会計監査交通費	23,000
学会賞	30,000

小計	4,340,000
前年度繰越金	985,006
合計	5,325,006

小計	4,905,000
次年度繰越金	420,006
合計	5,325,006

2008 年度会費納入のお願い

種生物学会の会費は前納制です。2008 年度までの会費に未納分がある方は、宛名ラベルの右下に金額を記してありますので、お急ぎお振込み下さいますようお願い申し上げます。

郵便振替番号 00240-6-45544 加入者名 種生物学会

※住所変更・会費・退入会に関する問い合わせは、下記の会計幹事までお願いします。

〒211-0063 川崎市中原区小杉町2-297-2

日本医科大学生物学教室 西谷里美

Tel 044-733-3592 Fax 044-722-1231

satomi-n@nms.ac.jp

会員移動

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

種生物学会ニュースレター36
発行 種生物学会
<http://sssb.ac.affrc.go.jp>
編集 木下栄一郎 (庶務幹事)
〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学
環日本海域環境研究センター植物園
Tel / Fax : 076-264-5874
発行日 2008 年 3 月 1 日
印刷所 金沢電子出版株式会社
〒920-1192 金沢市角間町